

久保孝雄言論選—戦後70年何を考え、何を論じてきたか—

はじめに

私は1929年（昭和4年）、茨城県南西部の小さな町で生まれた。今年で90歳になる。「久保君は昭和の生まれか、若くていいなあ」と先輩たちに言われたのがつい昨日のここのように思える。しかし、考えて見れば1929年から2019年まで、昭和、平成、令和と一世紀近い年月が流れている。

1929年と言えば大恐慌が世界中を襲った年であり、「戦争とファシズム」が猛威を振るった悪夢の「30年代」の入り口に当たる。日本でも天皇制軍国主義が暴走を続けた戦争に次ぐ戦争の苛酷な時代—1930年から40年代半ばまでの軍国主義時代の扉が開いた年に当たる。2歳で満州事変、小学2年で日中全面戦争、小学6年で日米開戦・太平洋戦争へと続き、旧制中学4年の夏、中国戦線でも太平洋戦線でも日本軍の敗退が続き、空襲による主要都市の焼土化、沖縄、広島、長崎の言語に絶する悲惨でとどめを刺された日本の無条件降伏により、天皇制軍国主義が支配した大日本帝国は滅亡した。史上初めて外国軍隊（米軍を主とする連合軍）の占領下におかれ、戦力放棄と戦争放棄が命じられた。

ここまで来るのに、日本人と、日本が侵略した国々の人々のどれだけの血と涙が流れたか。どれだけの命が失われたか。想像がつかだろうか。次頁の表とコメントを見てほしい。

これを見て発する言葉もない。

しかし国家指導者は誰も戦争責任を取ろうとしなかった。最高指導者昭和天皇は退位さえしなかった。占領軍は日本統治に天皇制を利用するため、昭和天皇を免責した。占領軍は東条英機以下の戦争指導者を裁いたが、彼らが裁いたのは戦争犯罪行為であり、戦争を起こした責任を裁いたわけではない。政府は「一億総懺悔」を唱え、敗戦必至の戦争を起こした最高指導者の責任を曖昧にしまったこともあり、日本人は自らの力で戦争責任を究明することはなかった。後世に生かすため自ら戦った総ての戦争を厳しく検証し、責任を明らかにしようとする先進諸国（例えばブッシュのイラク戦争を支持、参加したブレア首相の責任を究明した英国議会の例）との大きな違いである。

1966年から77年まで、現代中国建国の父・毛沢東自らがが主導した「文化大革命」の嵐が吹き荒れ、中国は崩壊の危機に直面していたが、この危機に身命をかけて挑戦し、抵抗勢力（文革派）との死闘を制し、国の進路を「改革・開放」へと大きく切り替え、今日の大国中国の基礎を築いたのは鄧小平である。その鄧小平はかつて「日本の侵略戦争に対する中国人民の記憶は、100

国名	死者数
中国	1000万人～ 2000万人
朝鮮	約20万人
台湾	約3万人
フィリピン	約111.2万人
ベトナム	約200万人
ビルマ	約15万人
マレーシア シンガポール	10万人以上
インドネシア	約400万人
インド	約150万人
オーストラリア	約2.4万人
ニュージーランド	約1.2万人
連合軍捕虜など	約6.5万人
日本	310万人以上
合計	2229.3万人～ 3229.3万人

日本本土	103,900人
小笠原諸島	15,200人
沖縄	89,400人
中部太平洋	247,200人
仏領インドシナ	12,400人
タイ	7,000人
マレー・シンガポール	11,400人
ビルマ・インド	164,500人
ボルネオ・スマトラ・ジャワ・セレベス	33,200人
モルッカ・小スンダ・西ニューギニア	57,400人
フィリピン	498,600人
東ニューギニア	127,600人
ビスマルク諸島	30,500人
ソロモン諸島	88,200人
朝鮮	26,500人
満州	46,700人
中国本土	455,700人
台湾	39,100人
樺太・千島	14,800人
ソ連	52,700人
合計	2,121,000人

■左表はアジア・太平洋戦争での各国の死者数である。出典は、吉岡吉典著『日本の侵略と膨張』（新日本出版社）、小田部・林・山田著『キーワード 日本の戦争犯罪』（雄山閣）など。

右表は地域別の日本陸海軍人戦没者数（単位：人）である。出典は、藤原彰著『飢死した英霊たち』青木書店。

【コメント】左表の死者は、アジア・太平洋戦争で日本軍によって殺戮されたものである。その総計は、2千万～3千万人と夥しい数にのぼっている。わけても中国の被害が飛びぬけて多い。あわせて住民虐殺が行われたインドネシア、米の強制供出による餓死者が多いベトナムの被害の大きさにも刮目したい。

右表では中国（満州＋中国本土＋台湾）での死者が54万1500人と最も多い。藤原彰は著書『飢死した英霊たち』において、各地域別に推計した広い意味での餓死者は、合計で127万6240名に達し、全体の戦没者212万1000名の60%強という割合になると指摘。これを31年以降の戦没軍人軍属230万という総数に換算すると、そのうちの140万前後が餓死者ということになるという。

「靖国の英霊」の実態は、名誉の戦死ではなく、飢餓地獄の中での野垂れ死にだったのである。戦死よりも戦病死のほうが多い。それが一局面の特殊な状況ではなく、戦場の全体にわたって発生したことが、この戦争の特徴であり、そこに日本軍の特質を見ることができると指摘している。また、餓死にも階級差があったという。それは生還者比率一将校67%、准士官77%、下士官36%、兵18%、に明確に表れている。幹部には食料の増量が認められていたのだ。

上級者に対する絶対服従の強制は、下級者である兵の人権を著しく侵害することになった。兵の人権に対する配慮を著しく欠いたことも、日本軍隊の特徴だった。兵士の生命を病気や飢えで失うことへの罪悪感が欠けていたのである。この体質が大量餓死をもたらした。アジア・太平洋戦争での日本の若者たちの悲惨な大量餓死は人為的なもので、その責任は明瞭である、との指摘には重たいものがある。【R】

年間は消えることはない」と言ったが、朝鮮民族の植民地支配に対する記憶も、東南アジア諸国の日本軍の侵略行為に対する記憶も同じである。日本の政治家や国民の一部には「いつまで謝ればいいんだ！」などという人がいるが、国として（国会決議などで）の公式謝罪は一度もない。（「村山首相談話」は国会決議ができなかったので「首相談話」になったことを関係国は知っている）。上の表でも明らかなように、100年謝り続けても消えないかもしれないほどの深い傷跡を残してきたことを忘れてはならないだろう。「未来志向」は過去を忘れたり、否定したりすることからは生まれない。

戦争に明け暮れた私たち世代の幼少年時代に、楽しい思い出などあったろうか。小学低学年まではまだあった。正月の餅つき、凧揚げ、かるた取り、こま回し、めんこ、初午、ひな祭り、花見、おはじき、お手玉、柏餅、こいのぼり、しょうぶ湯、小川での魚釣り、水浴び、夏まつり、盆踊り、秋祭り、運動会、遠足、学芸会、展覧会などなど、楽しい思い出が尽きない。だが小学高学年になると事情は一変する。出征兵士を送るための、「英霊」の帰還を迎えるための駅頭整列。出征兵士の家の農作業手伝い、軍用道路づくりのローラー引き、ガソリン代りの松根油用松の根掘りなど、小学生には荷の重い重労働も多くなった。

さらに旧制中学に進学すると軍事教練が正課に入っていた。藁人形相手の銃剣術の訓練のほか38（サンパチ）式小銃を割り当てられ、射撃訓練までやった。私はいずれも好成績で模範演技者に選ばれたほどだった。軍需工場や農作業手伝いが常態化して、学業はおろそかになっていった。それどころか、統制と配給制度の下で、飢餓と窮乏が子供たちの体と心を蝕んでいった。飼料用だったカボチャやサツマイモが主食になった。洋服や靴もボロボロになるまで使った。運動は裸足（はだし）だ。学童疎開や防空演習もあった。

こんな状況を見て、とくに小学生が松の根っこ掘りやローラー引きをしているのを見て、カボチャばかり食べて顔が黄色くなった子供を見て、「神州不滅、いざとなれば神風が吹く」と信じ込んでいたものの、「こんなことで戦争に勝てるのか」の思いが頭をよぎり始めたことも事実だ。

1945年に入ると、我が故郷の空にも、鹿島灘経由の米軍機が頻繁に飛来するようになった。圧倒的なB29の編隊にわが高射砲は届かず、迎撃に出たわが戦闘機が撃墜され、きりもみで落ちていくのが見えた。さらに近くの線路に燃料拾いに出ていた近所の子供たちに「危ないからやめろ」と注意しに行ったとき、グラマン1機が急降下してきて機銃掃射を始めた。「田んぼに逃げろ」と言って全員を稲むらに隠した。私たちを狙ったのか、線路を破壊しようとしたのかわからないが、2度ほど旋回したあと東方に飛び去った。また3月10日の東京大空襲の夜は南西の空がいつまでも赤く染まっていた。こんな中で、絶対口には出せなかったが「神州不滅」への信念が揺らぎ始めていた。

すでに広島、長崎の「新型爆弾」のニュースも入っていたので、8月15日の「玉音放送」には予感が走った。我が家に集まって「玉音」を聞いた近所の人たちは、雑音が多くて聞き取れなかったとか、日本が負けるはずがないと息巻いたりしていたが、私は「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」まで聞いてこれは「敗戦宣言」だとわかった。横浜から疎開していた姉が急に微笑んで抱いていた幼子に頬ずりしたのが印象的だった。

ここから戦後が始まる。MP (Military Police) や米兵を載せたジープがわが田舎町にもやってきた。筑波山麓にあった空挺(グライダー)部隊の司令官が住んでいた芝生つき豪邸(洋館)は直ちに接收された。司令官家族が引っ越した街なかの小さな家の庭に、入りきれないソファーや家具が雨に打たれていたのを今も覚えている。

占領軍による言論、出版の規制は厳しく、私信まで検閲され、戦犯追放、レッド・パージの嵐が吹き荒れたが、治安維持法廃止、政治犯釈放、農地解放、財閥解体、労働運動合法化などもあり、「食糧メーデー」(46・5)始め、「コメよこせ」「仕事よこせ」「民族独立」を叫ぶ労働運動、政治運動が火を噴くように激発し、「2・1ゼネスト」(47年)では「革命前夜」の雰囲気まで醸し出されたが、占領軍によって鎮圧された。講和条約発効後のメーデーで皇居前広場に押し掛けたデモ隊が警官隊に鎮圧された「血のメーデー」事件(52年)。戦後最大の政治運動だった60年安保闘争では岸内閣を退陣させたが、安保改定は阻止できず、池田内閣の「所得倍増論」「低姿勢政治」によって、戦後初期の荒々しい「政治の季節」はしだいに終焉していった。

戦後中期の「経済の季節」は、朝鮮戦争(1950~53)の「特需ブーム」を呼び水に55年から73年ごろまで年平均10%の高度経済成長によってもたらされた。世界中に日本製品があふれ、米国はじめ各地で貿易摩擦が発生した。米国会議事堂前で議員たちが、自動車の街デトロイトでは労働者たちが日本車の「打ちこわし」「焼き打ち」騒動を起こしたほどだ。68年には米国に次ぐ世界第2の経済大国にのし上がったが、この日本経済の「黄金期」は約20年続いた。エズラ・ボーゲルの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(79年)がベストセラーになったのもこのころである。

労働組合の脱政治化が進み、経済成長の波に乗って賃上げ闘争一本槍の「春闘」が定着し、ビジネス・ユニオン化が進んだ。高度成長のひずみ—公害・環境問題や都市問題に抗して立ち上がったのは労働組合ではなく市民運動だった。そのエネルギーで全国に革新自治体が叢生し、政治に新生面を開き、分権改革への突破口を築いた。社会党・総評ブロックはまだ議会で3分の1の勢力を保ち、改憲、右傾化阻止に一定の歯止め機能を果たしていたが、時代の変化に対応する思想や運動形態の自己革新が決定的に立ち遅れ、87年の国鉄民営化による総評最強の国鉄労組の解体を機に、弱体化と衰退がはじまった。

91年のバブル崩壊とともに三度び日本の様相は一変する。「失われた10年」が20年になり、間もなく30年になる。経済成長は0～1%前後に低迷し、2010年にはアジア第1、世界第2の地位を中国に譲った。中国とのGDP格差は4.5倍に拡大した(2017. PPPベース)。一人当たりGDPも80年代の世界トップクラスから26位に落ちた(2018. IMF)。競争力強化を目指して日本的経営―生涯雇用や年功賃金制度を廃止したが、国際競争力も80年代のトップレベルから30位(対象63か国)に落ち、中国、韓国を下回った(2018. IMD)。

バブル崩壊とともに始まった戦後後期は、本来は「成熟の季節」になるべきだった。戦後長らく追い求めてきた経済成長の末、供給力が需要を上回る時代を迎え、成長の目標は量的なものから質的なものへ転換すべきだった。少子高齢化、人口減少時代を迎え、それが不可欠の課題になっていた。しかし、成熟を目指すのは高度な政策課題であり、時代への深い洞察と、国民ニーズの質的変化への的確な把握が求められていた。それがなければ成熟は即衰退につながってしまう。そして日本の現実の歩みはそうやってきた。

だから戦後後期は残念ながら「衰退の季節」と言っていいただろう。国民生活に関係するほぼすべての経済(量的)指標はすべて下降線をたどった。国民負担は増加した。GDPに占める教育費や幸福度、将来への希望、女性の地位、報道の自由などの世界ランキングはいずれも先進国最低で、新興国・途上国並みになっているものもある。世界における日本の存在感は大きく低下した。

そのうっ憤を晴らすかのように反中、反朝、嫌韓のナショナリズムが高揚し、中国、北朝鮮の脅威を口実に、日米同盟(対米従属)の強化、軍備増強、平和憲法のなし崩し改憲が進んだ。戦後中期まで日本の民主化や日本型福祉社会を作るうえで貢献のあった労働組合や、社会党、共産党などの左派勢力を「日本をダメにした」「反日勢力」として罵倒・嘲笑する風潮が瀰漫してきた。特に日教組が狙い撃ちされた。いわゆる「ネトウヨ」が急増殖したのもこのころからだ。罵倒・嘲笑は左翼のみならず、リベラル派にも及び、リベラル派の萎縮も進んでいる。いまだに中国を一格下に見下ろして「日本褒め」する論調も後を絶たない。

こうした社会風潮にのって、あるいは促進するように政治の右傾化、劣化が進んだ。政治をワイドショー化・情動化させた小泉首相の劇場型政治、ワンフレーズ・ポリティックス、人事権や許認可権で官僚やマスコミを制圧した安倍一強下の「忖度政治」「詭弁・隠ぺい・改ざん政治」「やってくるふり政治」などはその典型である。安倍内閣では「日本会議」のメンバーが閣僚の過半数を占めるまでになった。政治に歴史認識や哲学の深みを持った経綸が失われてしまった。「官僚一流」との「霞が関神話」も、マスコミの「権力監視機能」も崩壊した。「国難」は外からくるだけではない。内からも生まれるのだ。

これからの日本はどこへ行くのか。これからの世界はどうなっていくのか。私はつたない頭でそれを考え続けながら生きてきた。この度、妻の遺言、多くの友人や娘たちの勧めで、その時々私が紡いできた思考の跡をまとめてみることにした。関心のある方の目に触れることを願いつつ、ご挨拶としたい。

(とりまとめに当たって、長年の畏友・井上良一君に一方ならぬお世話になった。彼は PC がない時代の論文をすべてデジタル化してくれた。記して心から感謝する。また小林信三さんの協力なしにはこの HP は生まれなかった。記して謝意を表したい。)

2019年6月7日 卒寿の日に

久保孝雄